空海の道

永　坂　嘉　光

21 世紀を迎えたが、平安時代の初めに空海が中国に入唐留学して 1200 年になる。空海入唐 1200 年の節目として、宗教関係者はもとより多くのマスコミ各社、著名作家等、白熱した空海論を展開し、記念の展示会や放映が頻繁になされている。

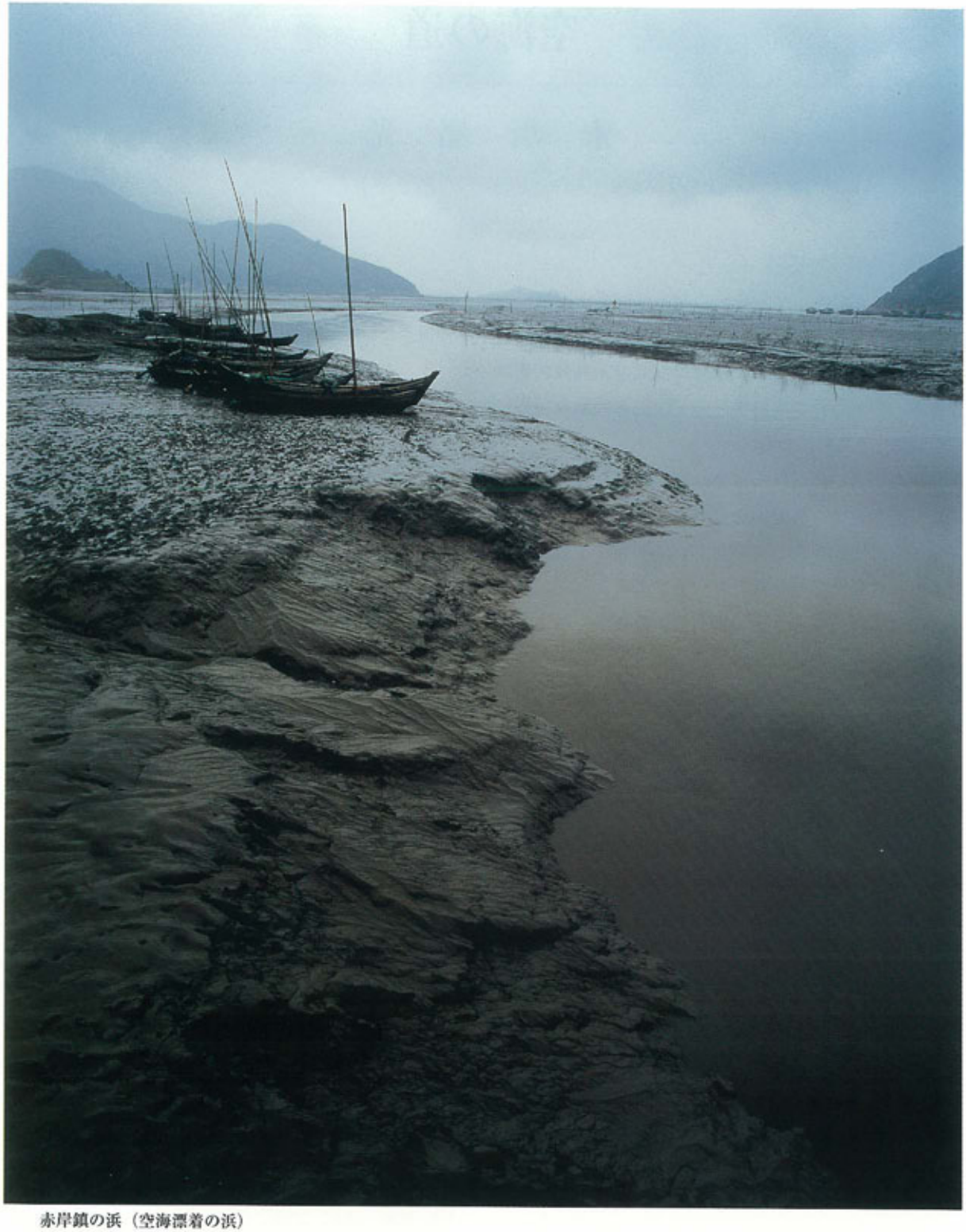
私は空海が開いた高野山に生れ育ち、長らく高野山を撮影してきたが、高野山をより深く知る為に空海の軌跡を知る必要性を感じていた。1200 年前に空海が歩んだであろう道を探り映像として著す事によって、イメージの中で歴史を遡らせ、空海の偉業を多くの方々に知っていただきたいと思い、日本全国と中国の空海の足跡、未開放区を含め（約 5,000K）全てを踏破した。その永い行程のなかで空海が単に密教だけでなく、土木工学、天文学、薬学、金属学、等多くの知識を身につけたと言われる地が各所にあった。空海は書の大家王義之の足跡を追って書の研究をし、その影響を受け帰国後に聾瞽指帰を書いている。

しかし、目的は密教を識る事であった。漂流した赤岸鎮の浜から都・長安への永い旅は続くのである。空海の中国での言葉に『星に発ち、星に宿し、晨昏、兼行す』まだ夜空に星が残る早朝に出立し、夜遅くなる頃、その日の目的地にたどり着いた。まさに目的とする都・長安に一日でも早く着き密教を体得したい、その気持ちがひしひしと伝わって来る言葉である。この時空海は、貴重な多くの密教の経典を日本にもたらす事になるとは思ってもいなかったのではないだろうか。

今回の中国撮影研究 5000 キロの旅は、空路で上海まで飛んだが、一日 4～7 時間の移動、41 度の灼熱での夏の撮影等、広大な中国大陸の撮影であった。

それぞれの各所の場の写真と解説を記します。1200 年前 31 歳で入唐留学した、空海のイメージを膨らませて頂きたい。

空海ロード5,000キロ



赤岸鎮の浜（空海漂着の浜）

小雨ふる浜にたった。遠浅の海が延々と続いていた。
その先の海の向こうには倭国日本がある、1200年の昔死力を尽くしてこの浜に漂着した空海の無上の喜びが時を超えて雨中の浜から伝わって来る様な感覚がこの地にあった。

開元寺（福州）

空海が上陸し、最初に宿泊した寺院と伝えられる、今は当時の面影を残すのみで、こじんまりとした佇まいである。供えられた香炉の火に当時を忍ぶのであった。

鼓山湧泉寺（福州）

空海が入港した馬尾港の近くの信仰の山（鼓山）には巨大な寺院がある、空海が登山したのでないかと思われている、巨大な釈迦如来の前で行われる勤行は堂内に響き渡り空海の中国での修行を彷彿とさせた。

江郎山

空海は28都鎮から江山まで90キロをひたすら歩いた。夜は江郎山の麓で宿泊した。江郎山は３つの奇怪な岩山から成り立ち、岩壁は裂ける様に頂上までほぼ垂直に切りたっている。神が創ったとしか思えない、素晴らしい自然の造形におどろく。
私は空海が宿した付近に泊まり、翌朝未明、岩山の頂きに数時間かけて登ってみた。眼下に空海が歩いた道が延々と続き、空海が上陸した福建省の山々と奥深い仙霞嶺などが連なっていた。江郎山、頂きから切り立った岩間を真下に降りる。２時間ぐらいでやっとの思いで下山し、山麓から江山へ向かった。空海一行が通過した山あいの道は延々と続き、親たであろう雄大な風景が広がっていた。

28都鎮

空海が宿泊したこの村は、13民族の言葉が使われ、118種の姓がある、清代につくられた土壁の家に住み、昔ながらの生活をしている。
空海はここで氷豆腐の製法を覚えたと言われている。
手作りの豆腐屋が並んでいた。

仙霞古道

唐の時代に開かれた古道である、この辺は長らく未解放区であった為に、空海が江山（江山は長安に向かう途上の都市）に向かう48キロの長い道程を通過した事は最近わかった事である。険しい高峰を越え28都鎮を経て２日かけて江山に向った。この道は福建省から山越えをして江山に向かう官道としての役目を担っていた。
近代史上では日本軍と中国軍との戦場でもあった事は記されている。古道の入り口には攻め入った日本軍の将校が落馬したと言われる落馬橋が残されている。

烏鎮の運河（抗州）

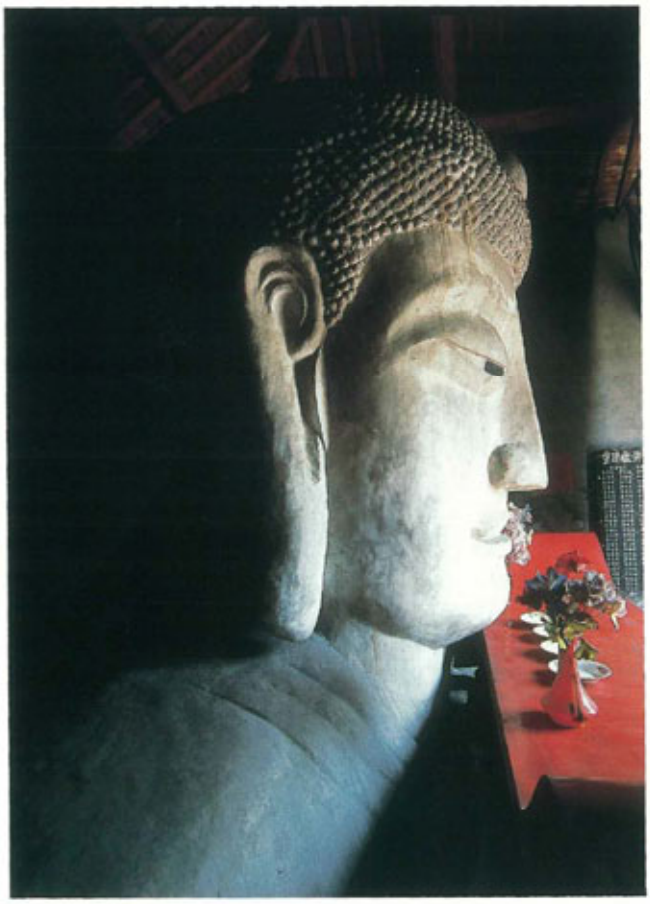
空海は抗州から水路をとり、京抗大運河で桐郷を経由、蘇州から陽州を経て開封に向かった。開封から陸路で長安に向かった。夜は船で宿泊し、陸上で宿泊できたのは数カ所しかない苦難の旅であった。
ここ烏鎮の運河は昔の風情をよく残し当時を偲ぶ事が出来る。今も運河に密着した中国人の生活や文化に触れる事の出来る数少ない場所である。

大福先寺（洛陽）

大福先寺も国が認める寺院で、善無畏三蔵が密教の根本経典である大日経を訳した寺院と言われている。遣唐使も宿泊した。空海はここで逗留した時、丁度密教が迫害されはじめた時期であったので、ここに蔵されていた密教経典を空海は授かったと言われている。

大雁搭（西安）

空海は804年12月23日長安城の東門から都に入った。当時の長安は300年近く続いた唐帝国の都として最後の輝きを見せていた。空海は青龍寺の恵果和尚に出会い弟子入りし、密教を授かる事となる。
空海は宿舎の西明寺から大雁搭を毎日眺めながら青龍寺に通ったであろう。
大雁搭は玄奘三蔵がインドから持ち帰った大量のサンスクリット語の経典や仏像を保存する為に652年に建てられ、度重なる戦火からのがれ今も西安のシンボルとしてそびえている。



峰山道場（紹興）

ここは、天台宗の開祖である最澄の修行場として長らく伝えられていたが、最近の研究で最澄が帰国後、空海が順教を師として滞在し、密教を学んだ場である事が分かった。
道場の裏山には唐代から刻み出された毘盧舎那仏が安置されている。高さ1.5メートルの頭部だけ完成されたが、仏教に対する迫害の乱によって、以後造像する事が出来なかった。空海も毎日この像を礼拝したのであろう。裏山の藪の中に埋まっていたが、仮のお堂が建てられ祭られている。